
あたしの竜馬

竜門弥生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

「JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あたしの竜馬

【著者名】

N4685D

【作者名】

竜門弥生

【あらすじ】

幕末の英雄・坂本竜馬の妻・お龍。竜馬が本気で愛し、竜馬を本気で愛した女性。竜馬亡き後、夫・竜馬と過ごした日々を回想するお龍。竜馬との出会いから、寺田屋事件を中心に、お龍の視点から見た坂本竜馬への思いとは?坂本竜馬の妻としてのお龍の姿を書いてみました。ある方からの「J指摘により、紹介文&文面を一部修正しました(平伏)

「竜馬、逃げてっ！！」

「お、お龍ー？」

自分の叫び声で、あたしは田を覚ました。

「・・・・夢？」

部屋を見渡してから、あたしは小さなため息をつく。

「夢か・・・。」

“お龍”

夢の中で、あたしの名前を呼んだ男。あたしが生涯で唯一、本氣で
惚れぬいた人。今でも、あの人のことを思い出す。ずっと、ずっと、
ずっと、愛してるから・・・。

「竜馬・・・。」

坂本竜馬。あたしが愛した血膾の夫。

「お龍さん！」

「・・・？誰だよ、あんた！？」

「わし、坂本竜馬言う者じやーお龍さん、わし、あんたに『ふろぼ
おづう』をしに来たんじやわー」

「・・・はあ？」

「だからーわし、お龍さんに惚れたらんじやーーー」

「え！？」

「お龍さん、わしのまことのこもつた『ふろぼおづう』、受けく
れんかのう・・・！？」

初めてあの人と会った時、あたしは言葉を失った。

あたしの父さんは医者だったが、安政の大獄で連座され、そのまま
獄死してしまった。父さんが死んでから、犯罪者の娘として、あた
し達家族は苦労に苦労を重ねた。泣いてなんかいられない。やられ
たら、やり返す！女だからって馬鹿にされないように、気を強く持
つて生きてきた。だからあたしは、滅多なことじや動じない。それ
なのに・・・。

「わし、お龍さんの氣風きつぶうのよさに惚れたらんじや！妹思いのあんた
に惚れた！」

「・・・あんた、廓くわの者・・・！」

その言葉で、あたしはある出来事を思い出した。

ある日、あたしのところに知り合いが来て、あたしの妹一人が、遊郭ゆうかく
に売られそうだと知らせてくれた。あたしは、側にあつた包丁を掴
むと、妹達の元へと向かった。扉を蹴り倒し、泣き叫ぶ妹達を抱き
寄せる。驚く売人の喉のどに、あたしは持つてきた包丁を突きつけた。

「誰の妹を売り飛ばす気じやー？そっちがその気なら、あたしはお
前を殺して、磔はりつけになつてやる！－いいや・・・刺し違えても妹は渡

さんよ！！」

「な、なんだ、お前は！？」

「！」の子らの姉のお龍じやーさあ、早く護身用で持つてゐる刀を抜かんかい！……これから殺し合いをするのよ！？大事な妹を廊にも、お前にも、渡してたまるか！！」

「ま、待つてくれ！落ち着い

・・・・！」

「ちよいとあんた！いきなりなにを

！？」

「それはこっちの台詞じや、世話焼きババア！…そこで見てるお前らも同罪じや！…一人、一人、殺すのも同じこと・…・…！…あたしの妹達を連れて行くなら、まとめてこの場で殺してやるつ！…」

「だ、だれか役人を

！」

「呼べ！今すぐ役人を呼べ、クソババア！…役人の前で、お前ら全員道連れにしてやる！…その体を切り刻んでやる！あたしの妹を奪う奴は、誰であろうとぶつ殺す！…」

「ひつ、ひいい・…・…！」

「わ、わかった！わかつたからやめてくれ！金をやるから、あんたの妹を連れて帰つてくれ！…」

包丁を振り回して怒鳴り散らせば、その場の誰もがあたしに従つた。あたしは、『侘び料』として妹達の代金と、妹一人を家に連れて帰つた。おかげで、あたしの妹を、遊郭に紹介しようとする馬鹿な輩やからはいなくなつたんだけど・…。

「わしな、あんたの話を聞いて、あんたに会いたくなつたんじや！妹思いのあんたを、一目見てみたかつたんじや！」

あの事件以来、目の前にいる男のように、あたしを見物に来る連中が増えた。客商売をしてるので、客が来ることは店の利益になつた。その分、あたしの手間賃も増えるので好都合だった。でもたまに、あたしに好きだのなんだのと言い寄つてくる輩がいた。あたし

はその度に、言い寄つてくる男供を追い返した。見物ついでに、女を口説く男に限つて、口クな奴はいやしない。だからこの時も、いつものように追い返さうとした。

「それじゃあ、見て気がすんだでしょ？！？仕事の邪魔だから、さっさと帰つて！」

「それは出来ん！わし、一目あんたを・・・お龍さんを見て、好きになつてしまふたんじゃ！」

「なによ、あんたあの売人から金でも貰つたの！？あたしを誘惑して来いとか言われたわけ！？」

「だから違うんじゃ！わし、人買いの知り合いなんぞおらん！純粋にお龍さんに誘惑されたんじゃ！！」

「あたしがいつ、あんたを誘惑したの！？」

「今。」

そう言つて、なにかをあたしに差し出す。

「これ・・・。」

「わしから、お龍さんへの『ふうれぜんと』じゃー。」

「『ふうれぜんと』・・・？」

「贈り物じゃ！贈り物！！」

男が差し出したのは、小さな花束だった。それは、どこにでもあるような花もあれば、それでもない花もあつた。いろんな花が混じつた花の束。それを、桃色の和紙に包んで、色鮮やかな紐で、変わつた形に結んでいた。

「・・・それが・・・これ？」

「やうじやーまあ・・・ちよつと、ショボいけどなあ・・・。」

そう言つて頃垂れる姿に、あたしの情がほだされた。思わず、男の手から花束を受け取つてしまつたの。あたしが受け取つた瞬間、男の顔がぱッと輝いた。

「気に入つてくれたんか！？」

「ううね・・・綺麗よ。」

あたしの言葉を聞いて、嬉しそうに、はにかむ男。ところが、何故か急に、悲しそうな顔でため息をついた。

「ビービーヴしたの？ そんな暗い顔して・・・？」

相手の変化に、思わずあたしは聞き返していた。すると男は、少し拗ねたような口調で言つた。

「・・・わし、本当は、きちんととしたものを贈りたかったんじや。でもな、用意してゐる間に、お龍さんを他の男に取られたらと想つて、焦つてしまつて・・・。」

「・・・え？」

「とにかくお龍さんに、あんたに惚れてる男がいるつてことを早く伝えたかったんだじや！ でも、手ぶらで会いに行くのも格好がつかんから、喜んでくれそうなもんをいろいろ考えたんじやが・・・。」

「・・・その結果が、これ？」

「これでもわし、頑張つたんじやよ？」

苦笑いを浮かべる相手に、あたしも自然と笑みがこぼれる。

「なに言つてゐるの？ これで十分よ。あたし、すゞしく氣に入つたわ。『やつ言つてくれるのは嬉しいが・・・やつぱり、わしの氣がすまんよ。本当はもつと良い物を、お龍さんに』『ふうれぜんとお』した

かつたんじや
・・・。

「落ち込まないでよー。あたしは、これで満足してるんだから、それでいいじゃないー!?」

「・・・すまんな、お龍さん。今、手持ちがなくて・・・。わしには、これが精一杯なんじや。」

「ちょ、ちょっと！お侍様が、自分の懐事情を、こんな人前で言つちやダメでしょうー？」

「ええよ。見栄張つても、ないもんはないんじやから。」「ないつて・・・・。」

「それにわしは侍じゃない。坂本竜馬じや！ わかりやすく言えば、優しいお龍さんに惚れた男じやよー。」

「え・・・？」

(優しい？あたしが？)

「お龍さん、誤解せんぐれ！わしは、どじの回し者でもない！ましてや、人買いの手先でもない！！」

「うるさい」

わしは、純粹にお龍さんに惚れてるだけなんじゃ！！！」

まつすぐな瞳^{ひとみ}が、あたしを見つめる。その瞬間、今まで感じたことのない気持ちにあたしはなつた。返事に困るあたしに、あの人はまじめな顔で言つた。

「ねえ、お籠さんを本城で殺してやるじゃーーー。」

店の中で、あたしに向かつて大声で宣言する男。客も、店の子も、みんな呆気にとられていた。大の大人が、人前で、それも本人の目

の前で、『好き』だと告白する。侍の格好をしてるのに、侍じゃないと言い張り、侍とは思えないほど、ほがらかな態度を取る。聞きなれない言葉を使いながら、あたしに花束を贈る男。大人のくせに、子供のように頬を少し染めながら言つ姿。二二二しながら、あたしの返事を待っていた。

そしてあたしは

「・・・なによ、『ふみかず』つい。」

竜馬の言葉に、胸が熱くなつていた。

その日を境に、あたしは竜馬と会つよつになつた。竜馬は毎日、あたしに会つに来てくれた。店の者が、『あれは有名な、坂本竜馬だぞー』と、騒いでたけど、そんなことあたしには関係ない。

「竜馬・・・あたしも、あんたに惚れた。」

相手がどんな男だろうが関係ない。惚れた相手が、『坂本竜馬』といつも前と身分を持つてたつてだけのこと。

「本当かー?」

「本当よー・・・す」ぐ大好き・・・ー

「じゃあ、愛しとるんかー?」

「うん、愛してるー!」

あたしの言葉に、あの人はずっと笑つ。そして、力いっぱいあたしを抱きしめてくれた。やつたあと、声を上げて喜ぶ竜馬。そんな竜馬に、あたしはすく嬉しくなつた。

「お龍！今日から、わしとお前はずっと一緒にや！――」

こうしてあたしは、竜馬が泊まっている『寺田屋』で、あの人と一緒に過ごすこととなつた。竜馬と暮らして始めてから、あたしはある人がすごい人だと実感した。みんな、竜馬を慕つて集まつてくる。竜馬に憧れ、頼ってきた。あの人は、どんな人間でも拒まなかつた。誰に対してもわけ隔てなく接する竜馬にみんな惹かれていた。

もちろんあたしも……！

「あたし……竜馬のこと、ますます惚れ直したよ。」

あの人腕の中で囁けば、あの人もあたしの耳元で呟いた。

「わしは、もつと惚れどるぞ。お龍のことが、大好きじゃ……！」

ひとなつ
人懐っこい笑みを浮かべて笑う竜馬。あたしも、それにつられて笑つた。竜馬といふ時、あたしはいつも笑つていた。だつて、とても楽しいんだもの。

誰からも好かれる竜馬。

だけど、そんなあの人を快く思つていない輩もいた。

「わし、敵が多いんじや。だからお龍も気をつけてくれよ。」

お龍になにかあつたら嫌じや、とあの人ほやぐ。あたしはそれを、いつも笑い飛ばしていた。竜馬を殺す奴がいるなら、あたしが竜馬を守つてみせる。そう思つていた。

「間違いないのか？」こに坂本竜馬が・・・？
「確かめた！殺すなら今じゃ。」

だからその会話を聞いた時、あたしはすぐに行動できた。
その時、あたしはお風呂に入っていた。竜馬は一階で、仲間の三吉さんと一緒に一杯やつてゐる。

そつと湯船から上ると、声のする方へと耳と目を向ける。するとそこには、浪人風の男達が話しこんでいた。

「奴は、我々に気づいていない。」

「よし、刀のサビにしてやるわ・・・。」

(「こつら竜馬を殺す氣だ！）

考
える
よ
り
先
に、
あ
た
し
の
体
は
動
い
て
い
た。
風
呂
場
か
ら
飛
び
出
す
と、
一
目
散
に
竜
馬
の
い
る
部
屋
に
飛
び
込
んだ。
そ
し
て、
愛
し
い
あ
の
人
に
向
か
つ
て
あ
た
し
は
叫
んだ。

「竜馬、逃げてっ！！」

「お、お龍ー？」

あたしの言葉に、竜馬は飲んでいた酒を噴出す。側にいた三吉さんも、大げさにむせかえった。

「酒なんか飲んでる場合じゃないよ！早く逃げて！」

「逃げ・・・！？お、お龍、お前その格好

！」

「今風呂場で聞いたんだよ！浪人達が、あんたを殺そうとしてるの！」

「なつ・・・・・？さ、坂本さんですか！？」

「本当か、お龍！？」

「そうだよーほら、早く逃げてー刀はどーーへーまた腰からはずしてーーー！」

咳き込む三吉さんと、田を見開く竜馬の頭を叩く。そして、無造作に転がっている刀を拾って渡した。

「侍が、刀を体から離してなにやつてんだい！？」

「怒るな、お龍！お前こそ、なにをしとるんじゃ・・・・！？」

痛たた、と言しながら、羽織はおりっていた着物を脱ぐ竜馬。

「お前・・・裸はだかでここまで来たんか？」

そつ言つて、あたしに服をかける。頭に血が上つていたあたしは、竜馬のその言葉で落ち着きを取り戻した。

「ずいぶん、『さあびすう』したんじゃなあー？」

ゲラゲラと笑う竜馬。その横では、坂本さん、と真っ赤な顔で三吉さんが注意する。

あたしは、竜馬のためなら、どんなことでもするつもりだった。だから、竜馬が笑った時、その耳を掴んで言つてやつた。

「のん気に笑つてる場合ー？あたしは、坂本竜馬のためなら、この格好でどこだつて行つてやるよー！」

「い、痛たた！お、お龍……」

「惚れた男のためなら、あたしは殺されてもいいんだよ。惚れて男を守るために、どんなことだつてしてやるー。」

「お龍……。」

「だから早く逃げてよ、竜馬あー！」

竜馬のために、急いで来たのに。なのにあの人は、ぜんぜん危機感を持つてない。

「！」の馬鹿！あたしがどれだけ……！

（どれだけ心配したのかわかつてゐるの……？）

自然と涙があふれてきた。その涙が、なにを意味しているかなんて、あたしはわからなかつた。わからなかつたけど

「……お龍、その浪人は、風呂場の側で話してたんか？」
「……そうだけ　りょ、竜馬！？」

あの人はあたしの涙をぬぐつた。暖かい……ゴシゴシとした大きな手で、あたしの涙をぬぐうと抱きしめた。

「お龍、すまんな。お前が知させてくれて助かつた。」

そう言つた竜馬の表情は、すこく真剣でまじめな顔をしていた。

「わしのために、泣いてくれとるんじやな。お龍を泣かせたわしは、

悪い男じゃ。」

「竜馬……。」

「心配かけたな、お龍。」

その言葉で全部わかつた。あたしが泣いてるのは、竜馬が原因。竜馬のことで泣いてるんだ。竜馬は、あたしの大事な人だから。心底惚れぬいた男だから。それほどの男だから。

「竜馬が死ぬなんて許さない……。」

「わしは死なんよ。お龍が、恥を忍んで知らせてくれたんじゃ。だから逃げるぞ。」

あたしの涙をぬぐいながら、優しい声であの人は言つ。でもその顔は、いつもとは違つ、【男の顔】をしていた。走ってきたせいが、あたしの胸はすぐドキドキしていた。でも、それだけじゃなかつた。

「わしらは、このまま逃げる。慎蔵君、急いで！」

「はい、坂本さん！」

「竜馬……。」

男らしい竜馬を見たせいだ。こんないい男、日本中探しても見つかりっこない。

そう思つて、ギュッと抱きつけば、竜馬も強く抱きしめてくれた。

「裏から逃げた方がいいな、慎蔵君？」

あたしを抱きしめたまま、龍馬は三吉さんと顔をかける。田だけでも龍馬を見れば、あの人は優しく微笑んだ。

「わかったよ、お龍。」

その言葉で、あたしの不安は吹き飛んだ。三吉さんも、龍馬の言葉で素早く身支度を整えた。

「ああ、寝起きしきつー。」

やつまつて、三吉さんは部屋から戸口へといたただけで

「待て待てーそりがじやなーーー！」

「えー？」

「龍馬ー？」

逃げようとする三吉さん、待ったをかける龍馬。これには、あたしも声をかけられた三吉さんも驚いた。

「なにを言つてるんですか、坂本さんー？」

「やうよー早く裏から

逃げるんはお前じや、お龍。」

「龍馬ー？」

「いいか、お龍。お前は裏から逃げて、助けを呼んでくれ。わしは、慎蔵君と一緒に行くからな。」

「助けてーーー今逃げるつて言つたじゃないーーーまさか戦つ気なのーー？」

「ノンノンーわかもも言つたが、わしらは逃げるんじやぞ？」

「でしたら、早く行きましょうーお龍さんの話では、奴らが」「

来るのも

「 時間の問題じや。だから、あつちから行いへ。」

そう言つて、龍馬が指差した先には小さな障子。^{しょうじ}

「 窓から逃げるのー?」

あたしの言葉に、シーツ、人差し指を立てながら龍馬は叫んだ。

「 大正解。わあ慎蔵君、夜の闇にまぎれようか?」

「 なるほどー屋根から逃げた方が、下まで降りる手間がはぶけます
ね・・・ー?」

「 わつこひことじや。お龍、お前も見つからんよつて逃げるんだぞ。」

「

「 龍馬・・・。」

「 お前になにかあつたら、わしは嫌じやからな。」

「 だつたら、腰から刀を離さないでよーあたしだつて、龍馬になに
かあつたら嫌よ!?」

「 刀がなくても平気じや。これをかませばいいんじやからー。」

そう言つて、懷から黒く細長い物を取り出す龍馬。変な形をした鉄
の塊に、あたしは首をかしげる。そんなあたしに、龍馬は満面の笑
みで言った。

「 西洋式の武器じや。これははすゞいぞー!どんだけすゞいかば、今
度教えてやるからなー。」

「 馬鹿ー!」の生き死にかかつてゐ時に、なにのん気ないとを・・・
!」

「 平気じやー弁天様の裸も揉めたからのー?」

「 龍馬つー。」

助平^{すけべい}な笑いをする龍馬に、あたしは声を荒げる。そんなあたしに、怖い怖い、と茶化す龍馬。

「坂本さん、お龍さんも！痴話喧嘩^{ちわげんか}はそこまでにしてください……」

あたし達のやり取りに、痺れ^{しび}を切らした三吉さんが声をかける。

「すぐ行くよ～慎蔵君。じゃあな、お龍。」

そう言つと、あたしに口付ける龍馬。人前でされたことと突然だつたことで、あたしは顔が熱くなつた。

「これも西洋式じや。」

「愛しとるわ～お龍。」

口をパクパクさせるあたしに、あの人はにっこりと笑いかける。そして龍馬は、素早くあたしから離れた。

そう言い残すと、夜の闇へと龍馬は消えてしまった。
その人の行動に、あたしは呆気にとられた。でもすぐに、部屋からも、池田屋からも飛び出した。龍馬がくれた着物を羽織、そこら辺に干してあつた紐^{ひも}をかっぱらつて腰に巻いた。

(あの助平！助平！助平龍馬！…)

三吉さんの目の前で接吻^{せっぷん}なんかして！なにが西洋式よ！？人が心配

してゐるの！

頭の中は、龍馬のことでいっぱい。龍馬に対する怒りや愛情、喜びや戸惑い、いろんな感情があたしの中に渦巻く。そんな気持ちを振り払つよう、あたしは夜道を走つた。

竜馬のために
・・・・・！

その後、あたしと龍馬は結婚した。龍馬と一緒にいる時間は少なかつたけど、それでもあたしは幸せだった。心のままに、笑つて、泣いて、怒つて、笑つて・・・・。

「新婚旅行じゃ！」

一緒にいれないあたしのために、龍馬は一人だけの時間を作ってくれた。夫婦水入らずで過ごすために、『新婚旅行』だと言って、あたしと竜馬は旅行に出かけた。

めまぐるしく変わる世の中で、これほど穏やかで、幸せな時間が過ぎるなんて・・・・。

「わしらは幸せじやな、お龍馬。」
「幸せよ・・・龍馬。」

竜馬が与えてくれる幸せが、永遠に続くように思えた。

竜馬が夢見る、争いのない、みんなが平等に暮らせる世界。身分や格式にとらわれず、平和で幸せに暮らせる世の中。坂本竜馬なら、それを実現させるとあたしは信じていた。本気で信じていた。

竜馬のことを

・・・・・

「竜馬・・・・・」

枕元に置いてある包みに手を伸ばす。

「なんで、死んじやつたのを・・・・・」

あんたが死んだと聞いた時、あたしはあんたが死んだなんて信じられなかつた。

「馬鹿だねえ・・・あれほど、刀を腰から離すなって言つたのに・・・・・」

信じられなくて、あんたに会いたくて、あんたの側に行こうとした。

「どうして、女房の言つこと書きかないのよ・・・・・」

でもあたしは、竜馬の死に顔を見れなかつた。

「男同士で心中なんて・・・浮氣もいいとこじゃない?」

怖くて見れなかつたんぢやない。

「もひ・・・何年経つのかね。あんたがいなくなつて。」

あたしはそんな弱い女ぢやない。

「竜馬・・・今日ね、あんたの『仲間だ』といふ奴らに会つてきたよ。」

竜馬の葬儀に行くことも、出ることも、坂本竜馬の仲間達が許さなかつた。

「あんたが死んだ時、あいつらはあたしに・・・竜馬の葬儀に来るなと言つた。あたしを『坂本竜馬の妻だと認めない』だつてさ・・・」

「！」

妻である、正妻であるあたしに、坂本竜馬の葬儀に来るなど、あいつらは言つた。

「それが今になつて、『坂本竜馬先生が、愛した人だから出てほしい』だつて。あいつら、世間の丑を気にして、あたしにそんなことを言つてきたんだよ? 馬鹿馬鹿しくて、笑えやしない・・・!」

竜馬の周りの男達が、あたしを嫌つてるのは知つていた。嫌いなら、嫌いなままでいい。無理して、好かれる必要なんかない。

「竜馬・・・あたし、悔しくなんかないからね。」

あたしは、龍馬に愛されていればそれでいいの。

「龍馬…………今のおたしでも、愛してくれる……？」

ゆっくりとした手つきで、お龍は布の包みをひもとく。

竜馬が死んでから、周囲の勧めもあって、あたしはあの人の実家に行つた。あの人育つた土佐の地で、残りの人生のすべてを、夫・坂本龍馬の供養にささげようと思つた。

だけど

「いぐら弟の嫁だつていつても、もう我慢できないねー」この性悪女！－今すぐ出て行きな、クソガキ！－！」

「その言葉、そっくりそのまま返してやるよークソババ！－竜馬の姉じやなかつたら、足腰立たなくしてやつてるぞ！」

あたしは竜馬の家族と・・・・姉の乙女とうまくいかなかつた。仲良くやろうと努力はした。でも、あたしも乙女も気が強い。そして、思つたままのこと口にする。乙女が、あたしをどう思つているかなんてわからない。だけど、竜馬を慕う志士仲間から、あることないこと聞かれていたらしい。『お龍』^{つやま}を嫌つて連中から聞いた話。坂本龍馬を尊敬し、敬うもの達から聞いた話。だから乙女は、会う前からあたしを嫌つていたんだ。あたしがどんなに『義姉』として慕つても、あの女があたしを『義妹』と認めるることはなかつた。結局、乙女義姉さんと喧嘩をして、あたしは土佐を飛び出した。

みんな・・・・誰もあたしを助けてくれない。

竜馬の仲間も、家族も、誰も・・・・あたしを助けるはずがない。

「あたし・・・妬まれてたみたいだよ。坂本竜馬が、一番愛する人間だったから・・・。」

苦しい生活の中で、町から町に流れ・・・横須賀にたどり着いた。そこであたしは、呉服商人をしている男と結婚した。

竜馬以外の男と結婚した。

竜馬以外の男の妻になった。

竜馬以外の男に体を許した。

生きていくために、竜馬以外の男に身を売ったの。

「あたしを『養ってくれてる男』は、あたしのことが好きなんだって。」

呉服商の男は、あたしを大事してくれた。あたしに一目惚れして、毎日あたしの仕事場に通ってきた。

「変なところが・・・あんたと同じだよ、竜馬。」

包みの中身を取り出し、それを手に取るお龍。

「あんたが死んでから・・・あたしは酒びたりの悪妻になつた。『ひどい女』っていう、烙印押されてるんだよ・・・。」

好きでそつたわけじゃない。

竜馬以外の男と一緒になつた自分が許せなかつた。

竜馬を忘れよつと、氣をまきらわぬつとお酒に手を出した。

「その結果が、手のつけられない悪妻なことか……。」

お龍の頬を涙が伝つた。その靈は、彼女の手の中へと落ちた。座じて、黒光りする塊の上へと……。

「これは、西洋式の鉄砲で、『銃』といつもんなんぢやよ。」「こんな短いのが……!?

短筒を見せながら、竜馬は子供のよつて笑つ。

「お龍、これお前にやるー。」

「はあ！？鉄砲をあたしにいー？」

「これな、鬱憤うつぶんがたまつた時にぶちかませ！スカッとするぞー。」

「竜馬、これはあんたが大事にしてるもんでしょうへ。それを、あたしなんかに

「お龍だから、やるんぢゃー！わしはもう一つ持つてゐからええんじやー！」

「だけどー！」

「いいから、いいからーわしさ、お龍が大好きだからやるんぢゃぞー！？」

「もうーなにかつて言つと、好きだのなんだつてー！」

「言える時に言いたいんぢゃー！手紙で書くより、面と向かつて言つた方がいいこじやねー！？」

「竜馬……。」

「それともお龍は嫌か！？」といふいうわしは

•
•
•
?」

しょんぼつとする龍馬。あたしは、そんな夫が愛しくて、嬉しくて、本当に

「大好き。」

そう言って、口付ければ、竜馬は真っ赤になつた。

「お、お籠ー!?」

「これが『西遊記』なんですよ」お龍にはかな

お龍にはかなわん！！

「いややん
降参とばかりに、両手を挙げる竜馬。
あ
ばんせん
万歳をした手は、そのままあ
たしを捕まえた。

「お龍、大好きじや！」

「あたしも竜馬が好き！」

「わし・・・お龍には、本物に一目惚れだつたんじやぞ?」

「あたしも

「あたしが、嘘言つてる風に見えるわけ！？」
「見えん！！」

お互に、強く抱きしめ合つ。ずっと、ずっと、愛しい相手を抱きしめた。

「竜馬……あんたが死んだのは、あんたがいけないのよ。」

竜馬からもひつた鉄砲を握り締める。

「『寺田屋』の時みたいに、あたしを側に置かなかつたのがいけないのよ。」

形見となつた銃は、とても冷たくて、熱くなつたあたしの心を冷やしてくれた。

「あたしを連れて行つてれば、『寺田屋』の時みたいに助けたのに。
・・。」

“竜馬、逃げてっ！！”

“お、お龍！？”

さつき見た夢を思い出す。寺田屋での出来事。
今でもあたしの夢に出でてゐる、懐かしい思い出す。

竜馬が死んだ日。あの日、あの場所にあたしがいれば

――

「竜馬は絶対……死ななかつた。」

あたしが竜馬を守つたのに・・・・・――

「竜馬・・・あたし苦しいよ。」

あんたが、あたしを好きだつて言つてくれた時みたいに、すぐ胸
が熱いよ。

だけど、あの時みたいに嬉しくもなんともない。毎日、つらうこと
ばっかりだよ。

「とにかく、落ち込んだ時に打つてみろー。」

そう言つて、渡された銃が、竜馬からの最後の贈り物。あたしはそ
れを強く抱きしめた。

竜馬が死んでから、日本は大きく変わった。平等の世界に程遠い。
どいつもこいつも、戦争、戦争で喧嘩ばかり。血みどろの争いを
してゐる。あんたの仲間だった連中も、志士も、同志も、子分も、信
者も、盟友も、みんなみんな
！！

「・・・いい」と思ついたよ、竜馬。」

そつと、銃を持つて、そつと部屋から抜け出すお龍。

「竜馬・・・『』に来てゐる『なり見ててよ・・・。』

あたしは今、あんたが死んで、その何回忌日かをしのぶための祭典さいてんに来てるの。年数なんて数えてないよ。だって、【裏切り者達】が

決めた『パフォーマンス』なんだから。

あたしは、その見世物として招待されたの。

「フフフ・・・まだ起きてる。」

洋式の建物の無数にある窓の一つ。そこだけ、明かりが灯つともていた。その部屋は、竜馬の部下だった男が使っている部屋。

「全員いるみたいね・・・。」

窓に映る人影を数えると、銃に弾を込めるお龍。

散々人を馬鹿にしておいて、今頃になつてから『坂本竜馬の妻』として認めるという連中。

「あたし・・・ずっと氣に入らなかつたのよね。」

月明かりを頼りに、銃口を的へと向ける。

“これな、鬱憤がたまつた時にぶちかませ！スカッとするぞ！”

「周りになんて言われようが関係ないの・・・。」

見栄や外見、体裁ばかりを気にする卑怯者ていきしゃの、小心者共！

「あたしは坂本竜馬の妻・お龍……！」

周りの許可なんて要らない。竜馬だけに必要とされればいい。あたしが望むものは竜馬との愛だけ。

「坂本竜馬に愛され、竜馬に妻として認められた女！」

せきねん積年の怒りと、恨みと、悲しみと、苦しみをこめて引き金に引いた。

ガラスの割れる音と共に、絶叫が館中に響く。

それを聞き届けると、上機嫌で彼女はその場を後にした。

坂本竜馬の死後、彼をしのぶ会が開かれた。

竜馬を慕う男達は、久しぶりの再会を果たし、思い出話に花をさかせた。彼らは夜中まで酒を酌くわみ交わした。話題は、坂本竜馬のこと

から、今後の政治、経済、女の話へと変わる。

そして、偉大なる坂本竜馬の話を戻した時だった。

銃声と共に、窓ガラスが割れ、部屋の中のシャンデリアが落下する。そして、部屋は漆黒の闇に包まれた。突然のことにつれ、逃げ惑う者、腰を抜かす者、怒鳴り散らす者で、部屋は大混乱になった。結局、狙撃をしてきた犯人はわからずじまい。無論、犯人を捕まることはできなかつた。そのため、この出来事は公にされることはないなかつた。

ただ・・・・彼らの部屋に打ち込まれた銃弾を見て、誰もが凍りついた。

「おい、この弾は・・・・！」

「間違いない・・・・！」坂本先生が使われていた銃の弾だ・・・・。

「誰かのいたずらじやろ？！」

「馬鹿言え！この型は古いから、もうどこにも売つてないし、政府

でも取り扱つていらないんだぞ！？」

「そ、それじゃあ

・・・・ば、化けてでられたのか！？」

「竜馬がか・・・・？」

「まさか！そんな非科学的なことが

・・・・！」

言い知れぬ恐怖を覚え、その場にいた全員が口を閉ざす。

その後、坂本竜馬をしのぶ会は無事に閉幕した。

あの晩、部屋にいた誰もが、無言のままそれぞれの岐路へとつぐ。

そんな中、ただ一人、『坂本竜馬の妻』だけは、満足そうに帰つて

いつたのだった。

(後書き)

最後まで読んでくださり、ありがとうございました！！
坂本竜馬の妻・お龍さんについて書いてみました。短編として書いたのですが、長々と書いてしまいました。。。その点が、ちょっと反省です（大汗）

今回、竜馬とお龍を題材にして書いたのですが、少し、オリジナルで書いてみました。坂本竜馬は、個人的にすごく好きで、その妻であるお龍さんもかなり好きです。だから、短編という形で、お龍さんを主人公にして書きました（照）

お龍さんが、竜馬の仲間に嫌われていたのは知っていましたが、竜馬の姉・乙女と仲が悪いというのは知らなかつたです。。。今回、この小説を書くにあたり、いろいろ調べているうちにわかつたんですね。。。汗）ただ、お龍という人間を調べていくうちに、この人が本当に愛していたのは『坂本竜馬』だけなんじゃないかと思えてなりません。

いろんな意味を込めて、竜馬とお龍が、死後の世界で仲良く暮らしていることを願います。。。！

誤字・脱字・史実と違うといふ点を発見された方、こつそりでいいので、教えてください。。。！よろしくお願ひします。。。！
ご連絡をいただき次第、即座に訂正いたします（下記）

の一部を修正いたしました（赤面）

そして本日、2010年6月9日、2009年10月16日に
ご連絡頂いていた方から「指摘により、後書きを一部訂正いたしました（大汗）！！

後書きで、【坂本竜馬が暗殺された事件】を『池田屋事件』などと
書いてしまいましたが・・・

正しくは『近江屋事件』でしたー（赤面）！…！
「めんなさい・・・・！」

後書きの間違いもそうですが、『連絡頂いたことにまつたく気づいていませんでした・・・（大汗）

親切で教えてくださったのに、気遣いとかお馬鹿過ぎます・・・本当にすみません・・・・！

本当に申し訳ありませんでした（土下座）！…！

そして、ありがとうございました（感涙）

間違つて、覚えてしまった方、心より、お詫び申し上げます・・・
(土下座) ! !

ご指摘くださった方のお名前は、その方のプライバシーを考え、前回同様この場では伏せさせていただきますが、本当にありがとうございます
ございました・・・・・！教えてくださった方、ありがとうございます
ます！なのに、気づくのが今頃と嘆ひのは・・・笑つてください。
・・（泣）

そして、なにも知らずに読まれた方！！真に申し訳ありません！！
本当に「めんなさい」！誤報を伝えてしましましたー！池田屋は新撰組関連の事件ですので、正しくは近江屋です！！読んでいておかしことと思いましたよね！？竜馬ブームで読み込んでいらっしゃる皆

さんに、失礼なことを・・・!
本当に、お騒がせいたしました（平伏）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4685d/>

あたしの竜馬

2010年10月15日21時40分発行